



成田禎介さん(三田9-6)
日展特別会員、示現会理事長
—ワカバ会事務局にて—

特集

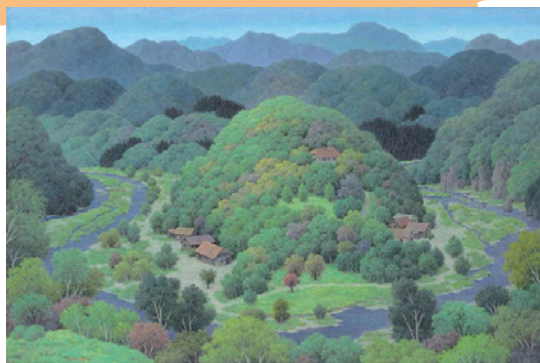
同窓生は今

2024

成田禎介さん(三田9-6)

三田高校の玄関ホールを抜けると左手にオセンチ山が目に入ります。「旧校舎の頃はこの玄関ホールの辺りもオセンチ山が広がっていて緑が綺麗だった」という話をよく聞きます。都会のど真ん中の高校でこれ以上緑を望むことは贅沢…しかし、今夏、玄関ホールに美しい緑の風景が広がりました。

三田9回生の画家の成田禎介さんが描かれた「川のみえる風景」(2022年制作)という120号(193cm×130cm)の大きな油絵が飾られたのです。まるでオセンチ山が蘇ったようです。この油絵は成田さんがワカバ会に寄贈くださったもので、内田校長先生にもご協力いただき、玄関ホールに飾られました。今回は、この油絵の作者であり、日展特別会員、示現会理事長を務められる成田さんにお話を伺いました。



『川のみえる風景』(2022)

高校時代は美術部で活躍、奥様との出会いも

—三田高での思い出教えてください。—

もともと目黒区に住んでいて目黒の中学に通ってました。高校進学時に六本木に転居することになり、中学の先生に勧められて三田に進学しました。

龍土町(国立新美術館そば)に住むことになったので、赤羽橋まで都電で通ってました。

当時の六本木は米軍基地や自衛隊がありましたが、今と違ってがらんとしてました。

高校では美術部でした。美術部は部員も多く、活発でしたね。1年生で部長になり、学校の講堂で展覧会を企画し、ギャラリーを作っちゃったんですよ。先生には怒られましたけどね(笑)。

—奥様も同じ美術部だったそうですが—

はい。学年は違いましたが、一緒でした。彼女はそれほど熱心じゃなかったなあ(笑)。美術部で夏にキャンプに行ったりしましたが、お付き合いはしていません。ただ、嵐の日にたまたま都電で一緒に帰る機会があり、その時に「将来、こうゆう人と一緒にいるんじゃないかな」とフツと感じたことがありました。卒業後も学年も違うし特に交流があったわけではありませんでした。でも、なんとなく仲間関係で行き来があり、それで何となく…不思議ですね。同窓生で一緒にいるなんてね。思い出が共有できるのはいいですね。

今回、油絵をご寄贈くださることになったきっかけを作ってくくださったのも奥様でした。奥様の同期の友人の「せっかくの素敵な絵をアトリエに置いておいては勿体ない。母校の方々に見ていただいたら?」の一言から始まり、ご寄贈くださることになりました。

ご理解があったご両親

—卒業後に美術の道に進まれたのですか—

高校卒業後、青山絵画研究所に通い、小川伝四郎先生のもとで学びました。その後、講師をして、示現会、日展へと通じます。この道でやってこられたのは両親に理解があったことが大きいと思います。就職しろ、とか何もいわれず、やりたいことをやっていた。お勤めしたこともないんですよ。不安もなく、のほほんとよくやっていたな、と思いますね。

30代に入った頃、フジテレビギャラリーで初個展を開いたのが始まりですかね。その後音楽に合わせて絵を紹介するTV番組『ミュージックギャラリー』に出演したりしました。三田佳子さんが司会で、ゲストは弘田三枝子さんでしたね。それまでやってこられたのはやっぱり親の理解が大きかったですね。

静物画から風景画まで

—風景画が多いようですが—

車が好きなので日本中、自分で運転して回りました。初期の頃は海が好きで燈台とか海辺を描くことが多かったです。それがあつた時山に行く機会があり、その時「緑」の綺麗さに気づいたんです。それからは「緑」が気になるようになりました。ヒマラヤにも行きましたよ。登山するのではなく、下から見た風景ですね。

だんだん「緑」の作品が多くなりましたね。

静物も並行してやっています。人物も描きますよ。前に舞妓さんを描きに京都に通ったこともあり。実際のお茶屋さんで仲間と一緒に金を出し合って。舞妓さんが休憩時間に廊下に現れた時、ぱつと花が咲いたような美しさにはっとして、描きたい!と思いました。



『小さな港』
(1963)
初期の頃の作品

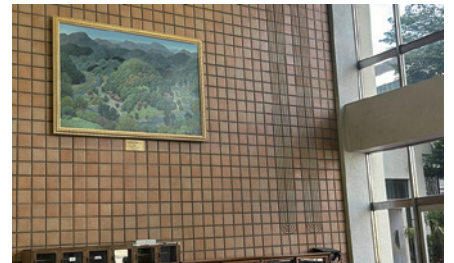


『舞妓』
(1985)

寄贈してくださった油絵「川のみえる風景」

—今回ご寄贈くださった「川のみえる風景」も美しい緑ですね—

近所の風景なんです。相模原、丹沢の方ですね。この川は道志川といいます。たまたま出会った地元の景色です。川と民家(集落)の姿が素朴な感じで、地元でもこんな風景があるのかと思って。出会いですね。スケッチは2時間くらいかな。現場は偶然みつかるもんなんです。このときもたまたま高いところに道があってそこから。今ならドローンなんか使うんでしょうけどね。



玄関ホールに飾られた
『川のみえる風景』

「緑」に対する思い—死ぬまで勉強

1つの絵の制作期間は3か月くらいかな。4月の示現会の展覧会に向けて、1月～3月に、日展は10月末だから8月～10月に制作にかかります。新たに1から始める場合もあるけど、過去の資料もいっぱいあるから今まで描いたものにさらにチャレンジを加えたり、なんかイメージが違うなと思って描き直したものもあります。同じ場所を今のイメージに合わせて改めて描くこともある。同じ場所でも全然違う作品になります。

「緑」に対する思いは強いですね。実際の色に近く描く良さを意識していたんですが、「写す」というより、自分なりに変化を加えてみたいと思っています。「緑」の研究、常識を超えた「緑」を何とか表現できないかなと思ってます。「きれい」だけでない見方ができればいいな、と。

「進化」というより自分なりの「変化」を求めています。今までと同じように「きちんと」はできるけど、それじゃ、満足できない。前の作品をみると面白みがないように感じる。絵を面白くしたいんです。特別なことをするのではなく、リアルさもあつつつ、変化をもたせたい。自分の路線は変わらないけど、死ぬまで勉強ですね。



左は『巖頭の燈台』(1994) 右は『燈台の島』(2021) どちらも同じ場所です

「久しぶりに学校も見たいと思って。私が過ごした校舎ではないけどね。」とおっしゃって、インタビューのために三田高校までお越しくださった成田さん。梅雨明け直後の酷暑の中でも汗一つかかず、涼しげなご様子。背筋もピシッとされてとても若々しいです。最後に若さの秘訣について伺ってみました。

—制作には体力も使われると思いますが、日常で気を付けていることはありますか—

マウンテンバイクで20キロ走ることを日課にしています。でも、今年の元旦に自転車で転倒し、救急車で運ばれてしまいました。肩と足の付け根を骨折です。半月、車椅子生活でした。1か月で退院し、2月末には飛行機で講演会にでかけることができました。さすがに家族には自転車を止められて…。でも、日頃足腰を鍛えていたことで転倒しても大事に至らず、回復も早かったんですよ。風を切って走ると、出会いもあるし、刺激になるので自転車はやめられないな、と思っています。

1か月の入院で自然と減量もできたんですよ。10kgも。病院食がよかったんでしょうね。それから体重はキープしています。食事にも気を付けるようになりました。腹八分目じゃ多いそうですよ。腹七分目がいいらしいですよ。

絵画に対してだけでなく、何事にも好奇心と探求心を持たれている成田さん。首相官邸へ貸し出された作品、国会議事堂に収蔵されている作品もあります。東京100景という東京都の企画で神津島の風景を描かれたり、ご活躍の幅は無限です。TV出演された時、ゲストだった弘田三枝子さんの実はファンだったからすごうれしくてね、などと楽しくお話してくださいました。「そろそろ日展の準備をしなくちゃいけないな」と笑顔で語る成田さんの絵画への情熱はまだまだ続くと思えました。



『山と河原』(国会議事堂所蔵)